

# プラトンの恋におけるパートナーの役割

脇條靖弘

## 1 問い

「相手なしの恋」が成立しないのは自明だと思われる。それは、「相手なしの対局」や「相手なしの説得」と同じように概念的に不可能だと思われる。たとえ、その相手が自分自身であっても、恋には（対局、説得と同様に）相手が必要である<sup>1</sup>。ただ通常相手は自分以外である。自分とは別の相手（自分と同一ではない相手）を「パートナー」と呼ぶことにしよう。プラトンのエロース論においては「恋」の究極の形が追求され、恋の営みの理想形は最終的に哲学的探求の営みと重ねられる。その出発点においては、プラトンの恋も通常の恋と同じくパートナーであるパイディカに向けられる。もちろん、その恋の契機はパイディカに映る美のアイデアの似像であり、その恋は最初からパイディカではなく美のアイデアを対象とする、と主張することも可能であるが、すくなくとも美のアイデアの想起の契機となるパートナーの存在は必須であると思われる。そうだとすると、その恋の営みの最終的な形、すなわち哲学的探求（それが依然として「恋」と呼ばれるのが正当かどうかは別として）においても（おそらくは以前と同じ）パートナーが必要なのか、という疑問が生じる。プラトンはたしかに、その書きぶりから、最終段階においても恋は自分とは別の相手をパートナーとして必要とすると考えているように思われる。プラトンの考える哲学の営みにおいてパートナーはどのような役割を果たすのか。

『パイドロス』では、恋には右の（良い）恋、左の（悪い）恋の二種類があるとされる（266a）。理想の恋は右の恋の究極の形である。それは『パイドロス』の「取り消しの歌（パリノーディアー）（244a-257b）」で描かれている。理想の恋も含めて、左右の恋の出発点に違いはない。どの人間の魂もかつて神に導かれて天を巡った時、天の外になんとか顔を出して真実在の一つである〈美〉を見たことがある。その経験が人間の恋すべての発端となる。左右の恋の違いは、〈美〉の似像である美少年（パイディカ）を見たときの反応の違いに現れる。左の恋においては、〈美〉の記憶が遠くなったこと、あるいは本人が墮落してしまったことから、〈美〉の想起が十分に働かず、そのため悪い方の馬が魂全体を支配し、相手との肉体的な交わりによる快樂を求めるようになる（250e）。他方、右の恋では、〈美〉の想起の力によって御者と良い馬が魂全体の支配を確保する。

<sup>1</sup> 現実に、囲碁や将棋の対局は自分を相手に成立するのかもしれない。AI は自分と対局して強くなるという。自分に対する「説得」も実際によく見られる現象であるのかもしれない。

この理想の恋において、恋の相手、パートナーであるパイディカの役割は何か。パイディカは〈美〉の想起を引き起こす美を持つ者であり、恋を発動させるきっかけの役割を持つことは明らかである。

しかし、これは恋の道の最初のステップでしかない。恋の道の行方にある最終目標は、パイディカとの哲学的対話を通じた探求によって得られるものである。恋の初期段階の激しい衝動を経た後、「落ち着いた<sup>2</sup>」探求の段階における共同の哲学の営みにこそ、人間にとって最高の幸福があるとされる。

そこで、もしよりよい思考の方が秩序ある生活、そう、哲学へと彼らを導いて勝利するならば、彼らがこの世で送る生は至福で (*μακάριον ε4*) 思いの一致したものとなる。自分自身を制御し、秩序を保つことによって、それによって悪徳が生じる魂の部分を隷属させ、それによって徳が生じる部分を解放するのだ。(256a-b)<sup>3</sup>

たとえば、『リュシス』に登場するヒッポタレスは、美少年リュシスに対する強い恋心を抱いている。彼はリュシスの持つ〈美〉の映像に打たれたエロス初期の「狂った」状態にあると考えられる。リュシス（の家柄）を称える歌を作り、クテシッポスら友人たちに聞かせ呆れられているヒッポタレスの姿は、『パイドロス』に描かれた狂気そのものである(204b-205d)。『リュシス』の中の対話の時点では、ヒッポタレスの恋がその後どのような道をたどるかはわからない。単なる失恋に終わる可能性も高いが、もしかしたら、通俗的な意味で恋が成就するかもしれないし、もしかしたら、リュシスを「手に入れる」(cf. *Phdr.* 253c *αἰρεθῆ, ἀλίσκεται*) ことに成功し、さらに、悪い馬をへりくだらせることに成功し、プラトンの目から見て最高の形で恋が成就するかもしれない。もしそうなれば、最終段階ではヒッポタレスもリュシスをパートナーとして落ち着いた哲学的探求をしているはずである<sup>4</sup>。

この最終段階におけるパートナーの役割は何なのか。そもそも哲学的探求にパートナーは必要なのか<sup>5</sup>。

---

<sup>2</sup> 最終段階の恋である哲学的探求の段階を「落ち着いた」と表現するのは適切ではない、と考える者がいるかもしれない。美少年の持つ美の似像に惹きつけられる強さは最後まで変わらないのかもしれない。その意味ではプラトンの恋は最後まで「激しい」ものと言われるべきかもしれない。しかし、最終段階では、少なくとも左の馬に象徴される欲望的部分の暴走は完全に制御されている。その意味でそれを「落ち着いた」と表現するのは許容されるだろう。

<sup>3</sup> 『パイドロス』の訳は筆者による。以下同様。

<sup>4</sup> この落ち着いた段階でのパートナーとの関係は、呼び名としては「恋(*ἔρως*)」よりはより広い「友愛(*φιλία*)」がふさわしいのかもしれない。

<sup>5</sup> 本稿の議論は、脇條 2016 の議論を踏まえたものである。

## 2 ぼっち哲学？

哲学に自分以外のパートナーは必ずしも必要ではない、ということを示唆するテキストもある。

### 2.1 自分との対話

プラトンにとって、哲学的探求は対話、問答であって、それは初期対話篇からずっと変わらない。問答には相手が必要であり、通常それは自分以外の他者である。しかし、『テアイテトス』189e-190a では、考えること ( $\tau\acute{o}$   $\delta\iota\alpha\nu\omicron\epsilon\iota\sigma\theta\alpha\iota$  e4) は自分自身との対話である、と言われる。

心が、何にもせよ自分の観察するものについて、自分を相手に、くわしく話すその言論 (はなし) ( $\lambda\acute{o}\gamma\omicron\nu$ ) を、ぼくは「考える」と呼ぶ。(中略) つまり、そのとき心は、自分が自分にむかって、問いもし、答えもし、肯定もし否定もして、まさに言論を交わしている ( $\delta\iota\alpha\lambda\acute{\epsilon}\gamma\epsilon\sigma\theta\alpha\iota$ ) のだとぼくには見えるのだ。そして心が——あるいは遅くあるいは急激に進みながら——ひとたびこれと思い定めて、もはや (かわらず) 同じことを言い、迷うことがなくなるならば、それをその心の思いなし ( $\delta\acute{o}\xi\alpha\nu$ ) とわれわれは定めるのである。だから、ぼくとしては、「思いなす」とは、言論する (言う、話す) こと、また「思いなし」とは、そこに語られた——といっても、他人にむかってでもなければ、声に出してでもなく、黙って自分にむかって語られた——言論のことであると、こう呼んでいるのである。<sup>6</sup>

たしかに、自分自身が相手でも相手がなくなるわけではない。しかし、対話、問答が自分相手でもできるのなら、そして哲学がその対話、問答によって成立するのなら、自分以外のパートナーは——そして、かつてその人が持つ美の映像に打たれた人、哲学の道に進むきっかけを与えてくれた人も——もはやその段階では必要ないように思える。

### 2.2 ひとり立ち続けるソクラテス

『饗宴』のアルキビアデスは出征先のポテイダイアでソクラテスが24時間立ち続けた出来事についてこう語る。

---

<sup>6</sup> 田中美知太郎訳を用いた。

この人は何ごとかに思いをめぐらし(τι σκοπῶν)、考察にふけりながら(συννοήσας) その場に立ち尽くしていたのだが、思うように考えが進まなかったので、投げ出すことなく探求を続けて(ζητῶν)そのまま立っていた。(220c)<sup>7</sup>

アルキビアデスは、この時ソクラテスが哲学的探求を行っていたと考えている。プラトンがそれを意図しているのは使われている用語から明らかであろう。これはまさしく自分自身との対話、それも長い徹底的な対話、問答であったのだろう。ソクラテスは戦場という環境にあっても、周りから自分を遮断してひとりで哲学的考察、探求を行うことができたのである。

この驚異的な行動が歴史的なソクラテスに実際に見られたものであるかどうかにかかわらず、このようにプラトンがソクラテスを描いている以上、プラトンの考える哲学的探求にはたしかに一人での探求が含まれていたと考えるべきである。そして、それは当然そうあるべきではないか。本来、理論的探求を突き詰めるためには世間から隔絶した環境が必要なのではないか。深い省察には周りの雑音の遮断が欠かせないと考えるのは自然なことである。

### 3 外的要因

パートナーは、哲学的問答、対話の営みに対して直接必要ではないとしても、外在的な理由で必要とされることは考えられる。

■ **パートナーに対する愛** プラトンの愛において個人はアイデアの想起の手段にすぎず、愛するに値しないものとされているとする Vlastos の意見に対して、White はプラトンにおいても個人に対する愛の余地は十分に残されていると反論している。(Vlastos 1973, White 1990) この点に関しては White に同意する。そうだとすると、哲学的探求にパートナーを求めるのは、そのパートナーに対する個人的な愛によるのかもしれない。この場合、哲学的問答、対話のパートナーは誰でも良いわけではなく、ある特定の個人——愛する相手——である必要がある。

■ **倫理的要請?** あるいは、長年連れ添ったパートナーに付き合い続けることが倫理的に要請されることはあるかもしれない<sup>8</sup>。エロスの初期の狂気の状態を引き起こしてくれたパートナー、哲学の道に進むきっかけを与えてくれた(恩のある)相手を(相手が関係を続けたいと望んでいるのであれば)捨ててしまうことは許されるのか。『国家』の洞窟の

<sup>7</sup> 『饗宴』の翻訳は朴訳を用いた。

<sup>8</sup> これは熟年夫婦が離婚しない理由の一部になるかもしれない。

比喩においては、哲学者は洞窟の中に戻ることを要請される。これは哲学にとって必要なわけではなく、洞窟の内部にいる人たちに対する倫理的要請によるものだと考えられる(520a-521b)。恋の道の最終段階の哲学的問答にパートナーが登場しているのがこのような倫理的要請によるのであれば、そのパートナーは特定の個人——倫理的要請を負う相手——である。

■人生の目的を他者と共有する アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第9巻第12章(1172a)で、誰もがそれぞれ自分の生きる目的を友と共有することを望むと言う。

まさにそれゆえに、ある者たちは一緒に酒を飲み、そしてある者たちは一緒にさいころ遊びをし、また他の者たちは一緒に体育競技をし、狩りをし、あるいは哲学をするが、それぞれの種類の人たちは、何であろうと自分たちが人生において最も愛着を寄せているものにおいて、共に日々を過ごすのである<sup>9</sup>。

ここでは、人は人生の目的を友と共有することを欲するという原理が、哲学も含めてあらゆるケースに適用されると論じられている。プラトンはこれに同意するかもしれない。その場合、哲学におけるパートナーは特定の個人ではなく、自分の人生の目的を共有してくれる相手であればよい。(それでも気の合う人がよいであろうか。)

プラトンは、これらの外的要因が働くことをおそらく否定しないだろう。しかし恋の究極の形としての哲学そのものに対しては、パートナーにそれ以上の役割はないのだろうか。問題は、哲学にとって外在的な理由からではなく、哲学的探求固有の理由からパートナーの役割が積極的に位置づけられるかどうかである。

#### 4 レトリックの要素

パリノーディアーは、『パイドロス』のテーマである「真の弁論術」の実例である。真の弁論術は説得の技術であり、その説得の内容が必ずしも真であるとは限らない。真の弁論術を身に着けた者は「他人を欺き、自分が欺かれないようにしようとする者(262a)」であり、

一つのあるものから出発して導きながら、その都度少しずつ離れて正反対のものへと類似性を通して少しずつ移動する、あるいは自分自身はそのことを逃れるという技術を持った者(262b)

<sup>9</sup> 朴訳を用いた。

である。そして、そのためには説得の相手の魂がどのような言論によって動かされるかということについての綿密な研究が必要だとされる(271-2)。

実際に 262d では、ソクラテスの行った二つのスピーチには欺きが含まれていると言われている。

どうやら語られたあの二つの言論(τῶ λόγῳ)からは学ぶべきものがあるようだ。

どうやって、真実を知っている人(ὁ εἰδὼς τὸ ἀληθές)が言論の中で戯れて聞く者たちを逸らせて導く(παράγει)か、をね。(262d)

「真実を知っている人」というフレーズから、「二つの言論」は、ソクラテスの第一のスピーチと第二のスピーチ(パリノーディアー)の二つと解釈しなければならない。すなわち、パリノーディアーでさえ「欺き」が含まれているのである<sup>10</sup>。

パリノーディアーのどこにその欺きがあるかは議論の余地があるが<sup>11</sup>、一つの可能性として、哲学的考察の生にパートナーが不可欠であるかのように論じることが、まさにその欺きであると解釈することも可能である。哲学にパートナーを設定することは、説得の相手(この場合パイドロス)に合わせたレトリックであって真実ではない、という可能性である。

パイドロスに対する説得は、理想の恋をやや俗な恋の形と並べて、そのわずかな違いを相手に気づかれずに移動することで達成されているのかもしれない。そのやや俗な恋は、パリノーディアーにおいて理想の恋のすぐ後に続いて描かれている。

しかし、もし彼らの生き方がもっと俗で知を愛する仕方ではなく、名誉を愛する仕方であったなら、おそらく酒に酔ったときとかその他何か気が緩んだときに、彼ら二人の放埒な方の馬が無防備な魂をとらえて、いっしょに同じところへ導いて、大衆によれば最も幸福な行為をつかみ取り、一線を越えてしまったかもしれない。そして一線を越えてしまったからには、それ以降またその行為をなすが、それは稀である。なぜなら、思考によって全面的によしと思われたことをなしているのではないからである。さて、この二人もさきほどの二人ほどではないが、恋の続く間もその後でも互いに親しい者となって人生を送る。そして、最大の信頼をお互いに与え、また受け取ったと考える。そしてその信頼を裏切って、仲違いするようなことは掟に背くことだ、と考える。そして二人が死ぬときには、翼は持たないけれどもあとわずかで翼を生やすまでに至ったところで肉体を去る。その結果、彼らが恋の狂気から得る報償は決してつまらないものではないのだ。というのは、すでに天空の下での行進を始めた者たちが、闇の中へ、つまり、地下の路へと入っていくのは法に

<sup>10</sup> この点については、脇條 2016 の補注 K, pp. 150-153 と解説 pp.222-3 を参照。

<sup>11</sup> たとえば、Scott は恋を「狂気」とするところに欺きを見ている (Scott 2011)。

反するからである。彼らはいっしょに進みながら輝かしい喜びの生を過ごして幸福となり、もし彼らに翼が生えることがあるなら、恋のおかげでいっしょに翼が生えるのが法の定めなのだ。(256b-e)

やや俗な恋において「大衆によれば最も幸福な行為」とされる肉体的な交わりにパートナーが必要なのは当然である。可能性としては、この俗な幸福のイメージとの共通点を保持するために、本来かならずしもパートナーを必要としない哲学的な探求にあえてパートナーを設定することで、ソクラテスはパイドロスに対する説得を「技術をもって」行った、とも考えられる。

## 5 人間の与りうる不死性

### 5.1 不死なる言論

たしかにレトリックために、パートナーの必要性について理想の恋を俗な恋と同等に扱うことは有効であったかもしれない。しかし、パートナーの役割はそれに尽きるわけではないように思われる。その大きな要素は、哲学的考察はパートナーを通じてはじめて不死性に与ることができる、という着想である。

『パイドロス』276e-277a では、「正義」などについての言論の中での遊びを称賛するパイドロスに対して、ソクラテスは次のように言う。

そういうことさ、パイドロス。だけどぼくが思うには、そのこと（正義など）についての（遊びよりも）ずっと美しい真剣な努力が生じるのは次の時だ。すなわち、人がふさわしい魂に出会った後、問答法の技術を用いて、知識とともに言論を蒔き、植え付ける時だ。その言論とは、自分自身と植え付けた人を助けることができるものであり、さらにはかならず実を結ぶように種を持っているものなのだ。それゆえ、（その言論は）異なる性格の中で異なるものに育つことによって、その種子を常に不死とすることができる。そして、それを持つ者を、人間に可能なかぎり (*εἰς ὅσον ἀνθρώπῳ δυνατόν*) 最も幸福にすることができる。(276e-277a)

この箇所では、哲学的問答によって生み出され、相手に植え付けられた言論は「種子」として絶えることなく伝わっていき、それによって人は不死性に与ることができると言われている。

『饗宴』のディオティマによれば、人は美の中での出産を求めており(206e)、パートナーとの肉体的あるいは精神的な交わりによってそれが達成される。この出産の構図は、大

秘儀(210a-212a)においても維持されている。

(あなたは思い至らないのですか。)ただこの場合にのみ、すなわち、美を見ることのできる器官によってそれを見る場合にのみ、その人には、触れているものが単に幻影ではないがゆえに徳の幻影を生み出すのではなく、触れているものが真なるものであるがゆえに徳を生み出す、といった事態が起こるであろうことを。そして真なる徳を生み出し育んだその人は神に愛される者となり、またもし人間たちのうちでだれか不死になることのできる者がいるとすれば(εἴπερ τῶ ἄλλῳ ἀνθρώπων ἀθανάτῳ)、そのような人こそがそうなのだということを。(212a)

さらに、『第七書簡』341c-dで、プラトンは自分にとって重大なことがらについては、自分の著作というものはないと述べ、次のように言う

そもそもそれは、ほかの学問のように、ことばでは表現されえないものであって、むしろ(教える者と学ぶ者とが)生活を共同にしなが、その問題のことがらを直接に取り上げて、数多くの話し合いを重ねていくうちに、そこから、いわば飛び火によって点ぜられる燈火のように、突発的に、学ぶ者の魂のうちに生じ、生じてからは、生じたものそれ自体が、みずからを養い育ててゆくという、そういう性質のものなのですから<sup>12</sup>。

もし、哲学におけるパートナーの必要性が、このような形で哲学的問答の種子を撒き、伝えていくことにあるなら、そのパートナーは必ずしも以前と同じパートナーである必要はないし、特定の個人である必要もない。もちろん、相手はだれでもよいわけではなくそのような種まきが可能な相手でなければならないが、そのような者であれば哲学者は喜んでパートナーにするであろう。(あるいは、そのような相手に出会ったときに、哲学者はそれゆえに相手を愛し、そのとき倫理的要請さえも感じるのかもしれない。)

## 5.2 魂の不死と人間の不死

プラトンにとってすべての魂は不死である(245c)から、人間がどのような人生を送ったとしても、その人の魂の不死性が損なわれることはないはずである。したがって、人が幸福となるために与らねばならないとされる不死は、魂の不死とは別のものでなければならない。人間の目指すべきは、魂としての不死ではなく(それはすでに与えられている)、肉体を持った人間としての不死である。

---

<sup>12</sup> 長坂訳を用いた。



魂の不死性については、『饗宴』と『パイドロス』は一つの面で対立しているように見える。『饗宴』では、人間が完全には不死性に与れないことが述べられているが、『パイドロス』（を含む他の対話篇）では魂の不死の教義が提示される。これをどのように折り合わせるかはこれまでも議論の対象となってきた（たとえば、Bury 1973 や Price 1989）。

この問題について踏み込んだ議論はできないが、問題は同一性に関係するのかもしれない。人間は魂を持つが魂（と同一）ではない。魂は不死であるが、人間は魂を持つ間のみ存続し、その間に不完全な形でしか不死に与ることができない。しかし、それが人間にとって最高の幸福の形である。このようにプラトンは言っているのかもしれない。

### 5.3 伝えるべきロゴスの種子とは何か

自発的に育つ種子とか、「自分を養う」という表現から、哲学の営みによって伝えるべきだとプラトンが考えているものは知識の内容というよりも、「自発的に学ぶ力」のようなものではないだろうか。『第七書簡』の箇所からも、それは書物に書いて伝達することは不可能なような性格のものであることがわかる。もちろん、このことは『パイドロス』における「書くこと批判」にも通じるものである。

## 6 まとめにかえて：ムーシケーとしての哲学

以上の考察を一旦まとめてみたい。恋の道の先にあるプラトンの哲学の営みは、その完成形では、(1)自分自身との対話、問答による探求と、(2)他者と共同の探求の両面があると思われる。後者は「種まき作業」と呼ぶのが適切かもしれない。このことは、哲学は数あるムーシケーの営みの代表格に位置づけられることを考えれば、むしろ当然なのかもしれない。哲学を管轄するムーサたち、カリオペとウラニアはムーサたちの筆頭に位置する(259d)<sup>13</sup>。ムーシケーには哲学以外にも様々なものが含まれるが、それらの活動はすべてこれら二つの側面を持つのではないだろうか。

音楽、歌、詩、ダンスといった哲学以外のムーシケーも一人で行うことができる部分、一人で行うべき部分と、他者なしにはできない部分がある。作詞、作曲、振り付けはひとりで行えるかもしれないが、パフォーマンスには他者が必要である。もちろん、自分に対するパフォーマンスはあるかもしれないが、それだけで終わってはムーシケー本来の機能を十分に果たしたとは言えないのではないか。やはり、それを他者に伝えてこそ、本来のムーシケーである。哲学も同じように言えるのかもしれない。（あるいはこれも哲学

<sup>13</sup>『パイドン』60eの「哲学こそが最も偉大なムーシケーである」の箇所を参照。

を音楽に似せて見せるプラトンのレトリックなのだろうか。)

そして、哲学以外のミュージケーのパフォーマンスにおいて何が種として撒かれているのか、何がそれ自体で育っていくものなのかと問われれば、それはやはりその内容と言うよりも、新たな創造を引き起こす力なのではないだろうか。たとえば、モーツアルトの音楽を聞いて打たれたベートーヴェンが新たな創造に向かったように。哲学の営みも何かそのような性質のものとして考えられているのではないだろうか。

## 文献表

プラトン『パイドロス』 脇條靖弘訳、京都大学学術出版会〈西洋古典叢書〉、2018年。  
脇條靖弘「プラトン『パイドロス』における哲学者と幸福」、『西日本哲学会年報』  
第24号、2016年、57-76頁。

Bury, R. G., ed. *The Symposium of Plato*, 2nd ed. Cambridge: W. Heffer and Sons, Ltd., 1973,  
xliv-xlv.

Price, A. w., *Love and Friendship in Plato and Aristotle*, Oxford Clarendon Press, 1989, 30-35.

Scott, D., 'Philosophy and Madness in the *Phaedrus*', *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 41  
(2011), 169-200.

Vlastos, G., 'The Individual as an Object of Love in Plato', *Platonic Studies* (Princeton, 1973),  
3-34.

White, F. C., 'Love and the Individual in Plato's *Phaedrus*', *The Classical Quarterly* 40 (1990),  
No.2, 396-406.

## 後記

オンラインで開催されました2021年9月4日のセミナーでは、本稿の発表に対して貴重なご意見をいただきました。「落ち着いた」哲学の営みにおいても、美に向かうエロスの強度はけっして弱くなってはいないのではないかというご指摘については、註2に反映しました。また、「パートナー」という言葉の意味が明確でないというご指摘をいただきましたので、単に「自分以外の対話相手」という意味であることをはっきりさせるように本文に手を入れました。ご質問、コメントを下さいました方々にこの場を借りてお礼申し上げます。